

高级日语教学参考

总主编 吴侃

第3册



W 上海外语教育出版社
外教社 SHANGHAI FOREIGN LANGUAGE EDUCATION PRESS
www.sflep.com

高级日语教学参考

总主编 吴侃 侃
主 编 吴志 志
编 者 吴金 金
编 者 刘玺 玺
编 者 张颖 颖

第3册

W 上海外语教育出版社
外教社 SHANGHAI FOREIGN LANGUAGE EDUCATION PRESS

图书在版编目(CIP)数据

高级日语教学参考. 第3册 / 吴侃主编. —上海: 上海外语教育出版社, 2012

ISBN 978-7-5446-2794-8

I. ①高… II. ①吴… III. ①日语-高等学校-教学参考资料
IV. ①H36

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2012) 第 098630 号

出版发行: **上海外语教育出版社**

(上海外国语大学内) 邮编: 200083

电 话: 021-65425300 (总机)

电子邮箱: bookinfo@sflep.com.cn

网 址: <http://www.sflep.com.cn> <http://www.sflep.com>

责任编辑: 曹 艺

印 刷: 同济大学印刷厂

开 本: 890×1240 1/32 印张 9.125 字数 258千字

版 次: 2012年8月第1版 2012年8月第1次印刷

印 数: 2 100 册

书 号: ISBN 978-7-5446-2794-8 / H · 1354

定 价: 22.00 元

本版图书如有印装质量问题, 可向本社调换

前言

《高级日语》自 2005 年 4 册全部出齐后，得到了广泛采用。现在特推出教学参考书，以便更好地服务使用者。

《高级日语》是日本国际交流基金的“日本語教育”项目的成果，与日本著名日语研究及日语教育专家村木新次郎教授合作完成。在项目进行期间，笔者与村木教授一起探讨了“高级日语”所应该包含的内容及达到的目标。最终确定，内容应该全面反映日本的社会文化，介绍日本社会、日本人的思维及行为方式的方方面面。题材的选择应该广泛，包括随笔、评论、报道、小说、相声、剧本等等。难度确定为：最初部分与国内大部分中级日语教材衔接，而最后一课达到日本大学入学考试的“国语”考题的难度，中间的课文难度呈阶梯式排列。按照这一想法，由村木教授组织了一批日语研究者（包括硕士生、博士生）收集课文素材。该项目在日本的共同研究阶段结束后，再由国内组织多校的资深学者进行编写，所有日语内容均由村木教授最后审核。

从出版后的情况及反馈的信息综合来看，当初的目标基本达到，未发现教材中存在明显错误的“硬伤”。但对于这样一部内容广泛、全面、具有足够深度的教材，要想吃透其内容并教授给学生，对教学者无疑是一个不小的挑战。

此次编写的这部教学参考书，主要就课文内容、表达等各个方面加上了注释，并全文翻译课文，以便教学者能够更加容易地、准确地理解课文，提高教学的准确性和教学效果。注释包括内容和语言方面，尤其是对于中国人理解起来难度较大的某些口语化的表达、需要与语境相关联考虑理解的表

达，以及含有古典语法的表达等，尽量做了详细的注释。课文翻译不考虑翻译技巧，尽量直译，以有助于理解课文原文句子。此外，编写了“课文背景”，以加深对与课文内容有关的日本社会文化内容的理解，并且加入了“扩展阅读”和“扩展练习”，供任课教师视需要选择使用。

吴 侃

2012.1

目 录

第 一 課	坊っちゃん	1
第 二 課	引き際	21
第 三 課	思いは深く	38
单元测试 1		57
第 四 課	なんでも見てやろう	61
第 五 課	伊豆の踊子	82
第 六 課	異文化の根っこ	106
单元测试 2		128
第 七 課	日本の耳	135
第 八 課	携帯上司	157
第 九 課	解かれた象	174
单元测试 3		190
第 十 課	演歌と日本文化	195
第十一課	ディア・フレンド	216
第十二課	自立と挫折の青春像	241
单元测试 4		261
扩展练习及单元测试参考答案		268
录音文字		280

第一課

坊っちゃん

1 作者介绍

夏目漱石（なつめ そうせき）（1867～1916）、小説家、評論家、英文学者。本名、夏目金之助（なつめ きんのすけ）。江戸の牛込馬場下横町（現在の東京都新宿区喜久井町）出身。俳号は愚陀仏。大学時代に正岡子規と出会い、俳句を学ぶ。帝国大学（後に東京帝国大学）英文科卒業後、松山で愛媛県尋常中学教師、熊本で五高教授などを務めた後、イギリスへ留学。帰国後、東京帝大講師として英文学を講じながら、『吾輩は猫である』を雑誌『ホトトギス』に発表。これが評判になり『坊っちゃん』『倫敦塔』などを書く。その後朝日新聞社に入社し、『虞美人草』『三四郎』などを掲載。当初は余裕派と呼ばれた。『修善寺の大患』後は、『行人』『こゝろ』『硝子戸の中』などを執筆。『則天去私』（そくてんきょし）の境地に達したといわれる。晩年は胃潰瘍に悩まされ、『明暗』が絶筆となった。

2 课文背景

『坊っちゃん』は、夏目漱石の中編小説。1906年、「ホトトギス」4月号別冊付録に発表された。作者の松山での教師体験をもとに、江戸っ子気質の教師が正義感に駆られて活躍するさまを描く。漱石の作品中、最も多くの人に愛読されている。

1895年、東京高等師範学校の教授だった夏目漱石は、四国の松山中学の教諭となる。数え年29歳のときだった。一年間松山ですごした

生活が、『坊っちゃん』成立に大きな関係があり、その間に見聞した事実や、接触した人物を材料にして、フィクションを作り上げたものである。

人生の最大の悪は虚偽であるということが、この作品のテーマといえる。「おれ」は庶民的な正義感の代表で、それが大多数の読者に愛される原因である。清の愛情も美しい。

井上ひさしは、『坊っちゃん』の映像化が、ことごとく失敗に終わっているとする個人的見解を述べ、その理由として、『坊っちゃん』が、徹頭徹尾、文章の面白さにより築かれた物語であると主張している。

3 课文注释

3.1 二階ぐらいから飛び降りて腰を抜かす奴があるか (P1、6行目)

「二階ぐらい」の「ぐらい」は程度の低いことを言う。二階のような低いところから飛び降りて腰を抜かすのはおかしい、だらしのない奴だという程度の意。

3.2 右の手の親指の甲をはすに切りこんだ (P1、11行目)

自然に切ると、右手を切ったので、「坊っちゃん」は左利きである。

3.3 尻を持ち込む (P1、下から8行目)

「尻を持ち込む」は「当事者に問題の処理を求める。後始末を求める」意。

3.4 やに色が白くって (P1、下から1行目)

「やに」は「いやに」(程度がはなはだしくて不可解な様子)の略。

3.5 瓦解 (P2、下から10行目)

ここでは、貴族制度が崩壊することを言う。

3.6 竹の先へがま口のひもを引っかけたのを水で洗っていた (P3、17行目)

ここでは「に」も「へ」も使えるが、「に」には密着性を表す意味があり、いかにも遠く離れている感じを表すために、「へ」を使っている。

4 课文翻译

哥 儿

夏目漱石

因为父母遗传的鲁莽性格，从小时候开始就净是吃亏。上小学时，曾经从学校的二楼跳下来，扭伤了腰，躺了一个星期。也许会有人问我为什么做那种傻事。其实也没有什么像样的理由。因为我从新建成的校舍的二楼伸头看，一个同学开玩笑地起哄说，不管你怎么逞能，也不能从那儿跳下来。工友背着我回到家时，老头子瞪圆了眼睛说，哪有从二楼跳下来就把腰扭伤的？我回答说，下次跳一个不扭伤腰的给你看看。

亲戚给了我一把西洋小刀，我让漂亮的刀刃反射阳光给同学们看。一个同学说，闪光是闪光但看起来不快。我打包票说怎么会不快，我可以割任何东西给你看。于是他提要求说，那就割你的手指看看。不就是割手指吗，你看看(就这样)，就斜着割入了右手拇指指甲。幸亏小刀不大以及拇指骨头硬，拇指现在还连在手上，但伤疤到死也不会消失。

.....

此外还干了很多淘气事。一次，带着木匠家的兼公和鱼店的阿角毁坏了茂作的胡萝卜地。还没有完全发芽的胡萝卜地上铺满了稻草，我们三个人在那上面玩了半天摔跤，结果，胡萝卜都被踩坏了。还曾经填埋了古川家水田的井，而被人家找上门来。那口井是把粗毛竹的竹节打通，埋在很深的地下，从中涌出水来，浇灌那一带的水稻。当时不知道是什么样的机关，就把石头、木棒等塞进井里，一直看到不再出水了，便回了家，正在吃饭，古川满脸涨红地吵上门来。好像是交了罚款才了事的。

老头子一点也不喜欢我。母亲只顾偏爱哥哥。这位哥哥肤色出奇的白，喜欢演戏扮旦角。老头子一看到我就说，这小子反正不会有出息。母亲说我做事粗暴，前途令人担心。的确没什么出息，就像你看到的这

样。对前途的担心也有道理,只是没被判刑活在世上而已。

母亲病逝的两三天前,我在厨房翻跟头,肋骨撞在锅台角上,疼得厉害。母亲非常生气,说再也不愿意看到你。于是,我就去亲戚家住。结果被告知母亲病逝了。没想到会这么快去世。要是知道病得那么厉害,我再老实点儿就好了。一边这样想着一边回到了家。哥哥说我是孝不孝之子,因为我母亲这么快就去世了。我感到窝火,就给了他一个嘴巴子,被狠狠地训斥了一顿。

母亲去世后,我和老头子、哥哥三个人一起生活。老头子什么也不做,一看见我就口头禅一般地说你不行,不行。到底什么不行,到现在我也不明白。真有这种奇怪的老头子。哥哥说要当实业家,一个劲儿地学英语。他历来就是个娘娘腔,我和他一直不合,平均每十天打一次架。有一次,和他下象棋,他竟然卑鄙地埋伏下棋子,看到我左右为难就冷言冷语地嘲笑我。我实在气不过了,把正好拿在手里的飞车朝他两眉之间砸过去。眉间被打破,出了点儿血。哥哥向老头子告状,老头子说要和我断绝父子关系,把我赶出家门。

当时,我感到无计可施,便死了心,准备被赶出家门了。这时,一个在我家帮佣了十年的叫做阿清的女佣,哭着向老头子道歉,老头子总算消了气。虽然如此,我一点也不觉得老头子可怕。反倒是觉得对不住阿清。据说这位阿清原本也是名门望族出身,贵族制度崩溃时落魄了,才至于到别人家帮佣。所以,是一位老太婆。这位老太婆不知何故,非常疼爱我。真是奇怪。母亲在去世三天前非常讨厌我,老头子一年到头拿我没办法,整个街道的人都把我看做粗野蛮横的坏孩子而嫌弃我,只有阿清凡事都拿我当宝贝。我早就知道自己是个不会被人喜欢的性格而死心了,别人把我当做一块木头我是一点也不在乎的,反而对于阿清这样捧我感到不可思议。阿清时常在厨房没人的时候夸奖我说:“你为人耿直,真是个好性格。”可是我不明白阿清说的意思。如果性格好的话,其他人也要对我好一些才对。每当阿清这样说,我总是回答说:“我讨厌奉承。”这时,老太婆说:“所以你有一个好性格呀。”说着,还高兴地看着我的脸,好像是她创造了我,并且为此感到自豪。看着都感到疼得慌。

母亲去世后,阿清更加疼爱我了。时常在我那孩童心里也感到奇

怪，不知道她为什么这样疼爱我。心里想真没意思，真是多此一举。真可怜。尽管如此，阿清还是疼爱我。时不时地用自己的钱买来金镢饼和红梅烧点心给我吃。在寒冷的晚上，她事先悄悄地买来荞麦面，不知何时把荞麦面汤端到我的枕边。有时甚至给我买沙锅面。不仅是吃的东西，也给过我鞋袜，给过我铅笔，给过我本子。这是很长时间以后的事了，还借给我三元钱。我并没向她借，而是她把钱送到我的房间，说你没零钱花吧，这个你拿去用吧。我当然说不要。但她一定要我用，我就先借下了，其实内心非常高兴。我把那三元钱装进钱包，揣进怀里上厕所，结果钱包掉到厕所里了。我慢吞吞地走出来，一五一十地告诉了阿清，阿清马上找来一根竹竿，说我给你取出来。过了一会儿，听到井边传来哗哗的水声，过去一看，阿清用细绳把钱包挂在竹竿头上，正在用水冲。打开钱包看了看，一元纸币变成了茶色，花纹有些模糊了。阿清用火盆烤干，问这样行了吧。我闻了一下，说有臭味儿。阿清说给我吧，我给你换一张。不知在哪里、如何蒙混的，拿走的是纸币，而拿回来的时候是三枚银币。忘记这三元钱买什么花了。当时说马上就还给你，而一直没有还。现在我想还给她十倍，但已经还不了了。

阿清给我东西的时候一定是在老头子和哥哥都不在的时候。我要说讨厌什么的话，最讨厌瞒着别人自己一个人占便宜。我和哥哥关系不好，但并不希望阿清背着哥哥给我点心和彩色铅笔。我有时候问阿清，为什么只给我、不给哥哥？阿清若无其事地说，哥哥有爸爸给买，不用我管。这话说得不公道。老头子虽然顽固，却没有偏心眼儿。可是在阿清的眼里就是那样的吧。一定是完全沉溺于溺爱之中了。虽然原本是有身份的人，却也是一个没有受过教育的老太婆，只能如此吧。还不仅如此，偏心眼儿的看法真是可怕。阿清认定了我将来会出人头地，成为一个优秀的人物。而哥哥只是长得白，毫无用处。遇上这种老太婆，真叫人受不了。她坚信自己喜欢的人一定能成为大人物，而讨厌的人一定会落魄。我从那时开始就没有什么将来成为什么样的人的想法，可是阿清总说能成能成，也就想大概能成为什么样的人。现在想起来真是荒谬。有一次我问阿清，我能成为什么样的人呢？可是，阿清好像也没有什么特别的想法，只是说肯定能坐在有人拉的车里，盖一座有漂亮大门

的房子。

而且，阿清想等我有了房子、独立生活后，和我一起过。她多次反复地说，请一定留下我。我也不由自主地觉得自己能有一座房子，就回答说，行，留下你。可是这个女人想象力非常丰富，问道：“你喜欢哪里？曲町还是麻布？”要在院子里做一架秋千，西洋式房间有一间就足够了等等，一个人自说自话地计划起来了。那时我并不想要什么房子，所以每次总是回答说：“西洋式的日本式的，那种东西我什么都不要。”于是，她又夸奖我说：“你是个寡欲的人，心灵纯洁。”无论说什么话，阿清都夸奖我。

母亲去世后五六年时间里，就是这样生活的。挨老头子骂，和哥哥打架，阿清给我点心，时常夸奖我。我也没有其他的希望，觉得这样就足够了。我想其他的小孩子大概也都差不多。只是阿清一有什么事就一个劲儿地说“你真可怜，不幸”，我也就想，那么我就是可怜、不幸吧。其他没有什么烦恼，只是老头子不给我零花钱，真受不了。

母亲去世后第六年的正月，老头子因为脑溢血也去世了。那年四月我将要从一所私立初中毕业。六月，哥哥也从商业学校毕业了。哥哥在一家公司的九州分公司找到了一份工作，必须到那里去，而我必须在东京做学问。哥哥说要卖掉房子、处理家产后去九州赴任。我回答说随便你怎么做。

.....

哥哥在出发去九州的两天前，来到我的住处，拿出六百元，说你可以以这个为资本做买卖，也可以做学费学习，可以随便使用，但以后的事就不再管了。作为哥哥来说，倒是一个令人佩服的做法。心想，不就是六百元嘛，不要也不会有什么困难的，但他那不同往常的恬淡的做法倒令我满意，便道谢后收下了。他又拿出五十元，让我顺便交给阿清，我毫无异义地收下了。两天后，在新桥火车站和他分别后，再也没有见过面。

我躺着考虑这六百元的用法。做买卖嘛，太麻烦，不可能做好。特别是六百元钱，也做不了像样的买卖。就算能做，现在这个样子，还不能在别人面前逞威风说受过教育，也就是说，怎么看都吃亏。资本就不管它了，用做学费学习吧。六百元除以三，每年花二百元，够学习三年的了。拼命学习三年，总能学到点什么。然后考虑上什么学校。我天生什

么学问都不喜欢。特别是外语啦文学之类的,更是实在讨厌。新体诗之类的,二十行中我连一行也看不懂。反正都是讨厌的东西,学什么都一样。正好经过物理学校时,看到了招生的广告,我想什么都是缘分,便领了一份学校规章,办了入学手续。现在想起来,这也是父母遗传的鲁莽性格导致的失策。

三年间和别人同样学习,本来素质就不是很好,成绩排名总是倒数快一些。可是,奇怪的是过了三年竟然毕业了。连自己也觉得不可思议,但总不至于去投诉吧,于是,老老实实地毕业了。

毕业后第八天,校长叫人来叫我。不知什么事,过去一看,原来是四国一带一所中学需要数学教师。月薪四十元,和我商量是否愿意去。我做了三年学问,但从没有做教师的想法,也没想过去乡下。当然,也没有教师以外的其他目标。和我商量时,我当时就回答说:我去。这也是父母遗传的鲁莽性格作祟的结果。

.....

终于商定的事都定了下来,出发的三天前,去拜访阿清。她患感冒睡在朝北的六平方米的房间里。看见我来了,马上坐起来问:哥儿,你什么时候有房子?她以为只要毕业了,钱就自然而然地装满口袋了。抓住这样的人称之为哥儿,也太荒谬了。我简单地说,暂时不会有房子,我要去乡下。她显得非常失望,不住地用手梳拢花白的鬓角。看到她太可怜了,便安慰她说:“去是去,但马上就回来。明年暑假一定回来。”看她仍然是一副奇怪的表情,便问她:“我给你带礼物回来,你想要什么?”她说:“我想吃越后的竹叶糖。”我从没听说过越后的竹叶糖,首先,方位就不对。我说:“我要去的乡下,好像没有竹叶糖。”她问:“那是哪个方向?”我说:“是西边。”她又问:“是过了箱根,还是箱根这边?”真叫我拿她没办法。

出发那天,她一大早就来给我帮忙。把来这里路上在杂货店买来的牙膏、牙刷、布毛巾等放入我的帆布挎包。我说不要那些东西,她也不听我的。一起坐车到了火车站,走上站台时,她看着已经上了车的我,小声说:“可能就此分别了,你多保重。”眼眶里满是泪水。我没有哭,但差一点就要哭了。火车开车过了很长时间,我以为不要紧(她已经离去、看不见我)了,便从车窗伸出头向后看,她还站在那里。不知为什么看上去显得很小。

5 練習答案

(一)

1. まっすぐで、物事を一気に進めようとする結果、他人と違った考え方を持ったり行動したりする人間であること。
2. C
3. 無鉄砲な気性である上、乱暴な振舞いをいつ、どこでするかわからないから。
4. 「おれ」のことを指す。
5. 「清」が「おれ」のことを「まっすぐでよい御気性」だと思っていたから。
6. 「清」が「おれ」を不自然なほど可愛がり、しかもその理由がわからないから。
7. 「に」は到着点を表し、方向を表す場合でも、密着する場合に用いられる。それに対して、「へ」は方向を表し、特にある程度離れた場所に多く使われる。このため、この場合「へ」を使うほうが汚れたがま口を身体から遠ざけて持っている様子がよく伝わる。
8. 語り手を表す第一人称「おれ」が一度も使用されていない。

(二)

1. 彼はちやほやされるとつい得意になって簡単に請合うたちだから、このようなときは、うんとお世辞を言えうまくいくよ。
2. 彼女にしては帰りが遅いな、どうしたんだろうと、みんなが心配しているところへ、彼女は澄ました顔で帰ってきた。
3. どうしようもないことだと思ってだれもが持て余して敬遠しているのに、彼だけが解決に乗り出そうとしている。まったく止せばいいのにと思った。
4. 転んだが痛くもなんともなかったから、のそのそ立ち上がってそのまま歩き読けた。
5. この刀はこうはすに日にかざしてみると、かすかに銘文が見える。これで由緒あるものだということがわかる。

6. 伝票を改めたら、改ざんが数カ所見付かった。彼は欲に目が眩み、これで公金をごまかしたらしい。
7. 「怠け者で有名なお方でも、食べ物になると、面倒も苦にならないと見えるね」と彼は冷やかした。
8. その、鈴木さんが出世したとかいう話をどこから仕入れてきたかわからないが、彼なら、課長のわがままに愛想を尽かして先月やめていったよ。
9. 彼は承知することは承知したが、すぐには始めないだろう。彼の性格からすれば、恐らくいろいろな条件が整うのを見届けてから着手するに違いない。
10. この夏の事故の多いことにはすっかり閉口した。台風で町並が荒らされたり、海水浴で人が溺れたり。事故はもう真っ平ご免だ。
11. 何も好き好んでこの職に就いたわけではない。会社が倒産し、失業の身となって職安をのぞいたら、たまたまこの口があったのだ。
12. 静まり返った廃屋、何となく気味が悪い。ドアを開けるが早いか、黒いものが飛び出してきた。すっかり腰を抜かした。よく見ると野犬だった。
13. 夕べ因縁をつけた連中のところへ怒鳴り込んでやるなんて、無鉄砲なことを言うな。あの連中は暴力団とつながっているチンピラじゃないか。

6 扩展阅读

坊っちゃん

夏目 漱石

学校には宿直があつて、職員が代る代るこれをつとめる。但し狸と赤シャツは例外である。何でこの両人が当然の義務を免かれるのかと聞いてみたら、奏任待遇だからと云う。面白くもない。月給はたくさんとる、時間は少ない、それで宿直を逃がれるなんて不公平があるものか。勝手な規則をこしらえて、それが当たり前だというような顔をし

ている。よくまああんなにずうずうしく出来るものだ。これについては大分不平であるが、山嵐の説によると、いくら一人で不平を並べたって通るものじゃないそうだ。一人だって二人だって正しい事なら通りそうなものだ。山嵐は *might is right* という英語を引いて説諭を加えたが、何だか要領を得ないから、聞き返してみたら強者の権利と云う意味だそうだ。強者の権利ぐらいなら昔から知っている。今さら山嵐から講釈をきかなくってもいい。強者の権利と宿直とは別問題だ。狸や赤シャツが強者だなんて、誰が承知するものか。議論は議論としてこの宿直がいよいよおれの番に廻って来た。一体痞性だから夜具蒲団などは自分のものへ楽に寝ないと寝たような心持ちがしない。小供の時から、友達のうちへ泊った事はほとんどないくらいだ。友達のうちでさえ厭なら学校の宿直はなおさら厭だ。厭だけれども、これが四十円のうちへ籠っているなら仕方がない。我慢して勤めてやろう。

教師も生徒も帰ってしまったあとで、一人ぽかんとしているのは随分間が抜けたものだ。宿直部屋は教場の裏手にある寄宿舎の西はずれの一室だ。ちょっとはいってみたが、西日をまともに受けて、苦しくて居たたまれない。田舎だけあって秋がきても、気長に暑いもんだ。生徒の賄を取りよせて晩飯を済ましたが、まずいには恐れ入った。よくあんなものを食って、あれだけに暴れられたもんだ。それで晩飯を急いで四時半に片付けてしまうんだから豪傑に違いない。飯は食ったが、まだ日が暮れないから寝る訳に行かない。ちょっと温泉に行きたくなった。宿直をして、外へ出るのはいいい事だか、悪い事だかしらないが、こうつくねんとして重禁錮同様な憂目に逢うのは我慢の出来るもんじゃない。始めて学校へ来た時当直の人とは聞いたたら、ちょっと用達に出たと小使が答えたのを妙だと思ったが、自分に番が廻ってみると思い当る。出る方が正しいのだ。おれは小使にちょっと出てくると云ったら、何かご用ですかと聞くから、用じゃない、温泉へはいるんだと答えて、さっさと出掛けた。赤手拭は宿へ忘れて来たのが残念だが今日は先方で借りるとしよう。

それからかなりゆると、出たりはいったりして、ようやく日暮方になったから、汽車へ乗って古町の停車場まで来て下りた。学校まで

はこれから四丁だ。訳はないとあるき出すと、向うから狸が来た。狸はこれからこの汽車で温泉へ行こうと云う計画なんだろう。すたすた急ぎ足にやってきたが、擦れ違った時おれの顔を見たから、ちょっと挨拶をした。すると狸はあなたは今日は宿直ではなかったですかねえと真面目くさって聞いた。なかったですかねえもないもんだ。二時間前おれに向って今夜は初めての宿直ですね。ご苦労さま。と礼を云ったじゃないか。校長なんかになるといやに曲りくねった言葉を使うもんだ。おれは腹が立ったから、ええ宿直です。宿直ですから、これから帰って泊る事はたしかに泊りますと云い捨てて済ましてあるき出した。堅町の四つ角までくると今度は山嵐に出つ喰わした。どうも狭い所だ。出てあるきさえすれば必ず誰かに逢う。「おい君は宿直じゃないか」と聞くから「うん、宿直だ」と答えたら、「宿直が無暗に出てあるくなんて、不都合じゃないか」と云った。「ちっとも不都合なもんか、出てあるかない方が不都合だ」と威張ってみせた。「君のずばらにも困るな、校長か教頭に出逢うと面倒だぜ」と山嵐に似合わない事を云うから「校長にはたった今逢った。暑い時には散歩でもしないと宿直も骨でしょうと校長が、おれの散歩をほめたよ」と云って、面倒臭いから、さっさと学校へ帰って来た。

それから日はすぐくれる。くれてから二時間ばかりは小使を宿直部屋へ呼んで話をしたが、それも飽きたから、寝られないまでも床へはいろいろと思って、寝巻に着換えて、蚊帳を捲くって、赤い毛布を跳ねのけて、とんと尻持を突いて、仰向けになった。おれが寝るときにとんと尻持をつくのは小供の時から癖だ。わるい癖だと云って小川町の下宿に居た時分、二階下に居た法律学校の書生が苦情を持ち込んだ事がある。法律の書生なんてものは弱い癖に、やに口が達者なもので、愚な事を長たらしく述べ立てるから、寝る時にどンドン音がするのはおれの尻がわるいのじゃない。下宿の建築が粗末なんだ。掛け合うなら下宿へ掛け合えと凹ましてやった。この宿直部屋は二階じゃないから、いくら、どしんと倒れても構わない。なるべく勢よく倒れないと寝たような心持ちがしない。ああ愉快だと足をうんと延ばすと、何だか両足へ飛び付いた。ざらざらして蚤のようでもないからこいつ